

看護目標共有に関する学生の気付き

——実習環境調整に対する振り返り——

三 輪 百合子*

佐々木 敦 子*

武 井 とし子*

I はじめに

看護の実践においては、患者のニーズに気付き、的確な看護的対応によって、より良い効果をもたらされなければならない。

その看護過程の体験について教官としては、実習環境を整え、学生への適切な動機付けを行い、看護目標の達成についての評価をフィードバックしてゆくことが大切である。

今回、婦人科実習において、二人の学生に一人の終末期患者を受け持たせた。この実習での大きな目標は、(1)看護目標が患者及び家族と共有できること。(2)看護目標共有のためのきめ細かな観察と意図的な働き掛けの実践とした。

二人の学生が意図的な患者家族への関わりを通して、目標共有の大切さに気付いていく過程をプロセスレコードにより振り返り、臨床実習を効果的に実施するため、教官としての実習環境調整について検討を行った。

II 学生背景及び実習展開

1. 学生の背景

学生A：27歳 既婚 医療短大看護学科卒業後総合病院外科，内科に4年勤務 養護学校の寮母として1年間勤務，看護についてもう一度考え直したいとの動機で専攻科へ入学。

学生B：21歳 未婚 医療短大看護学科卒業後専攻科へ入学。看護学科での母性看護実習で生命誕生に大きな感動を覚えたことが入学の動機。

2. 実習期間

学生A：昭和59年12月10日～12月21日（2週間）

学生B：昭和60年1月28日～2月8日（2週間）

3. 実習目標

(1) 患者及び家族との看護目標共有と効果的な看護実践。

(2) 目標共有のためきめ細かな観察と意図的な働き掛けの実践。

* 信州大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

4. 実習前準備

- (1) 実習目標, 方法についてオリエンテーションの実施。
- (2) 病棟婦長, スタッフ, 教官の出席により実習目標, 方法の確認。
- (3) 婦長, 教官の話し合いで, 実習目標達成にふさわしいケースを4~5例選択しておく。

5. 実習方法

- (1) 実習グループ学生数は, 3~4名。
- (2) 受け持ちは, 実習初日に事前に選択してあるケースの中から, 学生自身が自由選択する。
- (3) 毎日の患者, 家族と学生の関わりの場面をプロセスレコードに記録し評価する。
- (4) 1週目の金曜日に学生, 病棟婦長, 教官の出席でカンファレンスを実施し, 看護目標を明確にする。
- (5) 実習最終日のカンファレンスで, 2週間の看護実践について評価, 考察を行う。
- (6) 実習終了後, レポートを提出する。

Ⅲ 患者紹介

○島○○美殿 60歳 職業なし (以前は洋裁, 編み物教師)

病名: 子宮頸癌Ⅲb

家族状況: 夫(60歳)は公務員であったが昨年定年退職し, 妻の看護に専念している。長女(25歳)が母親の病気入院の為大阪より帰省し松本市内で勤務している。長男(28歳)は東京在住。近くに住む妹(58歳)が時々見舞い付き添いに来院する。

既往歴: S45年頃(46歳)高血圧を指摘されるが放置。S46年12月(47歳)左脳出血にて近くの内科医院へ通院し自宅療養。S56年2月(57歳)某病院に1カ月入院してリハビリテーションを受ける。現在後遺症による歩行困難, 嚥下障害, 言語障害がある。

現病歴: S59年9月20日(60歳) 性器出血出現し近医受診し止血剤投与される。7月6日 止血しないため某病院受診, 子宮腔部スミア-ClassV。8月7日 治療目的にて当科入院。9月11日~11月9日 ライナック照射20回。

Ⅳ 学生Aと患者の関わり

1. 受持ち期間中の患者の状態

治療は一応外照射が終了したものの体力低下が激しく, 腔内照射ができない状態である。胸部X-Pで肺への転移も認められ, これ以上の積極的治療は困難であり, 家族の強い希望により丸山ワクチンが使用されている。痛みに対して1日2~3回鎮痛坐薬(ボルタレン)が投与されている。

動静はベット上の生活のみである。排尿は留置カテーテルが挿入されており, 排便は緩

表1 患者との目標共有

場面A-1 12月10日(実習第1日目)14時 バイタルサインチェックに続いて

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt「つらいこと…(即坐に)片付けなきゃいけない子が2人もいる。」と急に目に涙をためて言う。 そこへ娘さん入室。	① 「〇鳥さん、今いちばんつらいこと何ですか？」 ③ 娘さんが入って来たので他の話題にかえた。	自分自身が予期したことは、症例やベットに横になっていることのつらさを聞き出せると思いき、思いきって聞いてみたがそうでなかった。自分の予後をどうとらえているのだろうか。娘さんが入って来たため、反射的に話題を変えてしまった。

下剤により調節されているが、不定期、無感覚に泥状便が大量に排泄されるため、紙オムツが当てられている。

食事は嚥下障害があり、以前固形食摂取中窒息状態になったことで流動食が出されている。しかし患者はそれには不満であり、家族が寿司、煮物等持ってきて食べさせている。

2. 場面構成における学生の気付き

(1) 場面A-1(患者との目標共有)(表1)

この場面は、実習当初の学生が苦痛の軽減のためまず患者は何を望んでいるかを知り、看護の目標を患者と共に確認し合いたかったための問い掛けであると判断できる。学生は患者の予期せぬ反応に戸惑っている様子が見られる。一方、患者は毎日の苦痛の中で自分の余命を感じつつ、即座に母親として子を思う気持を表現した。死を意識した言葉の中に生への執着がうかがえ、学生は、生と死の狭間で苦悩する患者の心をつかみ、患者理解に一步近付いたようである。

(2) 場面A-2(家族との目標共有)(表2)

丸山ワクチンの話題をきっかけとして、学生は家族の気持をしっかりと把握している。最後に『私達もできるだけお手伝いさせていただきます』と結んでおり、家族と学生の間でしっかりと目標の共有が成されたと判断できる。

(3) 場面A-3, A-4, A-5(患者、家族との目標共有)(表3)

足が動くようになるには時間がかかるということ。便通があり、食欲があることは健康な証拠であること。それぞれの場面において患者を中心として家族、学生の間で目標共有への努力がみられる。

(4) 場面A-6(美に対する欲求の把握)(表4)

人はだれでも、特に女性の場合は常に美しくありたいという欲求がある。重傷入院患者の場合、生きるための必要最低限の欲求は満たされても、美しくありたいという感情面での欲求はなかなか満たされないものである。しかしどんな場合においても美しくありたいという欲求を満たすことの大切さを感じさせられた場面である。それを自分自身が知覚した『綺麗な着物を着たけど髪が広がっちゃった』とことばがけをし、次の援助『気分が良

表2 家族との目標共有

場面A-2 12月11日(実習第2日目) 10時 モーニングケア-後御主人との会話

患者及び家族の言動	学 生 の 言 動	判 断・評 価
<p>② Pt うなづく 夫 「ええ、この頃痛みもおさまっているようで、あっそうだ、今日は丸山ワクチンの日だ」 Pt 「……」無言、表情変えない</p> <p>④ 夫「ああ、あの人は薬の名前は知っているが何の薬かは知らない。無頓着な人で、そのかわり自分が納得したことには頑張りまのきく人だ。脳出血2回もやって元気になった。今度も生命力の強い人だからなんとかなると家族は皆信じている。(少し涙声になって) わしは病気のことを、たちの悪いできものが体の中にできてしまっていて目に見えない。治るが時間がかかると言っている。実は先生が最近代った。前の先生はしょっちゅう我々を呼んで覚悟しておいて下さいと言った。家族の身になればわかっているもつらい。今度の先生は、丸山ワクチンも承諾してくれた。病室へも来て話してくれる。本当に生命力の強い人だから絶対がんばってくれると思う」</p>	<p>① 「おはようございます。夕べはよく眠られたそうですね」</p> <p>③ 「あゝお注射はあとでしますね。お尻のガーゼ交換もあとでうかがいます」退室する。御主人と廊下で「先程、丸山ワクチンとおっしゃったけど本人は御存知なんですか」</p> <p>⑤ 「そうですね、〇島さんががんばっていらっしゃるから、私達できるだけお手伝いさせていただきます」</p>	<p>丸山ワクチンなんて言葉を出していいのかな。知っているのかな。</p> <p>途中、私は相槌をうつ程度で、御主人が一挙に話をされた。家族の思いも知り、また患者の人柄等もわかることができたように思う。</p> <p>御主人は本人の生命力の強さをほめているが、本人にしてみれば、そういう家族がいるからこそ、支えになっているのだと思う。</p> <p>家族の気持ちを汲みながら看護していきたいと思う。</p>

かったら髪を洗いましょう』と対応して、観察から援助行動へスムーズに移行している。

(5) 場面A-7 (家族との目標共有) (表5)

どんな場合でも健康の回復へ結び付け、気持の和むひとときがある。そんな中で、夫の気持ちを察する学生の優しさが現れている。

表3 患者・家族との目標共有
場面A-3 12月13日(実習第4日目) 11時 点滴抜去後の会話

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① Pt 「さっきから足をじっと動かそうとしてるんだけどちょっと動かない」	② 「そんなにあせっちゃだめですよ。私達でも1日寝たきりでいれば次の日歩くのに変な感じがするでしょう。それをずっとこうやって寝てらっしゃるんだから、急には無理ですよ。まず栄養つけて、体力つけたところで、今度は動く練習していかなくちゃ」	足のことを気にしている。御主人も「時間がかかるが直る」と励まされているので、同じように励ましていこう。
③ Pt 「そうだね」とうなづく。		うなづいているが納得しているのだろうか。

場面A-4 12月13日(実習第4日目) 14時 検温後アイスクリーム摂取助中

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① 便臭あり, Pt 無表情	② 「あれ, お通じあったかしら, ちょっとごめんなさい」 泥状便中等量あり	患者は無感覚で出てしまうことを, きっとつらいと思っているにちがいない。それを「よい状態」としてとらえさせ, 対応していきたい。
③ Pt 何も言わず, 無表情 夫「ああ, 毎日出ることはいいことだ」	④ おむつ交換, 殿部清拭施行 「毎日出て順調ですね。おなか柔らかくなりましたよ」	

場面A-5 12月14日(実習第5日目) 11時 妹さんの介助でおやつのもようかんを食べている時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt 「うまくないねえ」と言 って笑う。 妹「いやだわ, せっかくいただき きものを持ってきてあげたの に」と言って笑う。	① 「おいしいですか」 ③ 「むせないように気をつけて 食べて下さいね」	妹さんが来てにこやかだ。会話自体2人で反対のことを言っているも雰囲気はなごやかだ。 ○鳥さんの食べることへの意欲を知ってびっくりした。私はまだ目撃したことがないが, そういうこともあるのだと思った。この食欲, 生への意欲として大切にしたいと思う。
④ 妹「なにしろこの人は食べる ことについては大変な人だから。 私が食べようとしたものでも 気に入ったものがあるとさっ と横から手を出して, あっと思 った時はもう口に入れている。 あれだけ力があれば大丈夫だ」 Pt 笑って聞いている。	⑤ 「食べられるのが何よりで すものね。栄養つけて体力つ けて」	

表4 美に対する欲求の把握

場面A-6 12月18日(実習第6日目) 合せの着物に着替える時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① 昼前妹さんが家から持ってきた合せの着物を用意している。 Pt 「着替える」 妹「お昼すんでからだよ、○○ちゃん(娘)が来るから」	② 「どうですか、今着替えますか」	Pt に鏡と言われて、はっと気付いた。なぜもっと早く気付かなかったのだろうか。横になったままの体で自分の見えるところといたらごくわずか、せっかく新しい着物を着ても良く見えないのだ。
③ 妹「午後でいい、もうお昼も来るし」	④ 「じゃお昼終わってから着替えましょう」 ⑤ 昼食後着替えのため訪室すると娘さんが来ている。 「さあ、着物着替えましょうか」	鏡を持ちしばらくそのまましていると自然と徐々に顔がほころんでくる○島さんを見た。時々笑顔は見ているが、受持ってから最高の笑顔だった。
⑥ Pt 「はい」	⑦ 更衣する「ああ、いい着物でいいですね」	昼前本人は一度「着替える」と言ったきりで妹さんの意志にまかせてしまった。更衣後はじめて本人の気持が理解でき、あの時 Pt の意志に添えば良かったと思った。
⑧ 娘「おばちゃん、袖切っちゃったんだって。家でも着られないような着物だね」 Pt 「うん、うん」と胸のあたりを見おろしてから、「かがみ、かがみ……」	⑨ 鏡をとって見えるように向ける。 「ね、きれいですね。よかったですね。いい着物持ってきてもらえて」	
⑩ Pt じっと見ているにこにこ笑う。 「うん、うん」と満足そうにならずく。	⑪ 「着物はいいのを着たけれど、髪が少し広がっちゃったから、明日気分が良かったら洗いましょうか」 ⑫ 「じゃまた明日やりましょう」	鏡を見た時、髪に手をやったのを思い出し、洗髪をすすめてみた。基本的な生活の援助というものが、生きていくことに欠かせないものだとすることを改めて認識した。
⑫ Pt 髪に手をやりうなずく。		看護側からの押しつけでなく、Pt の意向に沿った援助について考えさせられた。

3. 教育的評価

場面A-1～A-5が一週間の関わりであるが、学生は、看護過程の中で常に患者及び家族との目標共有に努め、実習の早い段階で患者自身が『まだ親としてやらねばならないことがある』と表現したことで、死を覚悟しながらも生きることへの望みを持ち続けていることをつかんでいる。また、患者の「生」への意欲をもちたて、わずかな望みにも縋って回復を信じようとする家族の熱い思いをもつかんでいる。

表5 家族との目標共有
場面A-7 12月21日(実習最終日) 9時 朝の訪室時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt 「おはよう」	① 「おはようございます」	急に笑い出したため何があったんだろうと思った。 準夜で「おなかが痛い痛い、芋でいっぱいだ」などと言っていたと引き継がれた。また朝の申し送りでは意識明瞭とあったが、夢を見ていたのか。健康的な夢だと肯定している御主人の気持ちが良くわかるような気がする。
④ Pt 「フッフッフ……」と笑い出す。 Pt 「夕べねえ、眠れなかっただ、夢見ちゃって、クリスマスでねえ、芋料理作って腹いっぱい食べただ。そしたらおなかが苦しくなってきた気がしてねえ」	③ 「夕べは眠れました？」	
⑥ 夫「夢の中でも健康的な夢だいいや」 Pt 笑っている。	⑤ 「そういえば、夜の看護婦さんが言っていました。ああ夢を見ちゃったんですか」	
	⑦ 「そうですねえ、夢見ちゃって寝ぼけちゃったんですねえ」	

一週目のカンファレンスで、学生の報告より、患者及び家族の目標が明確にされたため、病棟婦長から、「夫はすべてを理解し、冷静な判断で対応しているようにみえるが、過去において何度か危機に直面したとき動揺がみられたことがある。終末期看護においては、家族との協力で患者看護を実践する時期と、家族の苦痛を理解し家族の支えとならなければならない時期があり、患者及び家族との関わりを通して判断していくことが必要である」とアドバイスがあった。

教官の立場としては、目標共有後の具体的行動目標の明確化と、看護実践評価の必要性について指導し、また参考図書の紹介により、終末期看護に対する考えを深めるよう指導した。

ディスカッションを通し次の看護の目標として(1) 基本的ニードを満たすことにより「生」への意欲を失わないように援助する。(2) 患者と一体となっている家族の苦痛を理解し、家族と共に患者の支えとなるよう援助する。をあげ、具体的看護行為、行動として看護実践するよう指導した。カンファレンス終了後、カンファレンスに出席できなかった病棟スタッフに対し、学生の気付きと看護の目標を伝え、協力を依頼した。

二週目の実習では、場面A-6～A-7にみられるように、学生は更に具体的目標共有のための意図的働き掛けと共に、今後の看護の姿勢を明確に伝えている。その中で学生は、目標達成時には共に喜び、自分の喜びを伝えるという看護行動がとられるようになっている。また、学生の鋭い感性は、患者及び家族のほんの少しの行動、表情も見逃さず、それをとらえて看護を展開できるようになった。

学生Aは、実習最後の感想の中で「医療はどうしても医療者側からの一方通行になりがちである。しかし医療者側と患者側が目標を共有すること、また、それを共有していることをお互いにわかり合っていること、また、そういう関係をいかに早く成立させるかが大切だと思う」と述べ、目標共有の大切さに気付いている。

V 学生Bと患者の関わり

1. 受持ち期間中の患者の状態

全身状態はさらに衰弱し、呼吸困難出現し酸素投与され、疼痛も強くなり痛み止めの坐薬の回数も増えている。常にウーウーとうなる苦痛な状態と、うとうとする傾眠状態を繰り返している。

食事は、誤飲の恐れがあるため摂取禁止となり、1月31日よりIVHが挿入される。その後2月6日よりIVH挿入のまま食事（流動食）が再開される。そして学生の実習終了後の2月12日に患者は家族、病棟スタッフに見守られて永眠された。

表6 触れ合いによる接近

場面B-1 1月28日（実習第1日目） 14時 検温時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① 夫、寝ている Pt 「ウーウー」うなっていていきているようだがまだ排便がない	② 「苦しいね、36.4℃です ね」	短い言葉は比較的是っきり話す すが少し長くなると聞きとり にくく、私もそうだったが、患者 もじれったかったと思う。結局 私はわからないまま体温計をも どしてしまった。
③ Pt 「そう」と笑顔、その後 手をベッドの上のほうをさし、 何か言っていたがよく聞きとれ ない。	④ 結局わからず、体温計を持 って退室する。しばらくして 来てみると夫が起きていて、 体温計は病室に置いておくこ とを聞き、とりに行く。 「ごめんなさいね、気がつか なくて」	後で患者にあやまると、それ ほど気嫌を書していない様子だ った。とても寛大な人だと思 うと同時に申し訳ない気持ちにな った。
⑤ Pt 「いいえ」笑っている		

場面B-2 1月28日（実習第1日目） 17時 帰りのあいさつの時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt 「そう、ありがとう、が んばってね」と手をさし出す。	① 「今日はこれで帰りますけ ど、又明日よろしくお願 いします」 ③ 「〇島さんもね」握手をし て部屋を出る。	今日一日患者の言葉が聞きと りにくく、何回も聞き直したり して、患者に受入れてもらえ るか不安だったが、最後に笑顔で 握手できほっとする。

表7 表情による意図的働きかけ

場面B-3 1月29日(実習第2日目) 9時 排便ないため腹部状態観察に訪室

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt 「おはよう」	① おはようございます」	排便がなく苦痛であることに 対し私もつらそうな表情で話す と、患者も気持ちをわかっても らっていると思ったか笑顔が見 られた。比較的無表情でうなっ ていることが多かったので、こ の時の笑顔は印象に残った。少 し気持ちが通じた感じがした。
④ Pt 「出ない」と言いながら も表情は明るい。	③ 「まだ出ないんですね」と つらそうな表情で話す。	
⑥ Pt 「ウーウー」うなってい る。	⑤ 「おなかを暖ためてみまし ょうか。刺激になると思うか ら」	
	⑦ 腹部マッサージ、温電法施 行。	

表8 家族の動揺に対する援助

場面B-4 2月1日(実習第5日目) 15時 尿量チェックのため訪室時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① 夫、経口的飲食禁止になって いるのに、患者の枕元でアイス クリームをとり出し食べさせよ うとしていた。	② 「あゝ今日から食べること 禁止になっているんですけ ど」	飲食禁止は話されていたはず なのに、夫はアイスクリームを 持ってきてあげようとした。患 者が欲しいと言ったのかどうか その点はわからなかった。 二度も窒息死寸前までいって 命をとりとめたことがあると聞 いたが、今回も又同じことをし ようとしたことについて、患 者、夫共にこの容態の悪いこと に動揺させられているのか。食 べたいものがあれば一口でもい いから食べさせてあげたいと思 ったのか。 患者のみならず、夫の看護も 大切である。
③ Pt 「そうだね」 夫「そうですか」知っていなが らやっぱり断わられてしまった という表情である。	④ 「息苦しいね、誤まって、 飲みこんでしまってもいけな いし、先生も3~4日はだめ だって言ってたでしょう。も う少し元気になったらまた食 べられるから」	
⑤ 夫「栄養も十分いってるか ら」	⑥ 「そうよ点滴で栄養とって るから」	
⑦ 夫「ごめんな」すまなそうに 食べはじめる。 Pt 横目で見ている。「おなか もすかないし(便も)出ないし ……」	⑧ 「元気になったら食べれる からね、今とても大切な時だ から、つらいけど頑張って ね」	
⑨ Pt 無言、無表情で天井を見 つめている。		

表9 死への援助

場面B-5 2月1日(実習第5日目) 18時10分 帰りのあいさつのため訪室

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① Pt 私の顔を見るとすぐ「どこ行ってたの」	② 「一週間の反省会があったからごめんね」	「忍耐と努力と愛情」という言葉をかみしめるように何度も言った。生きていくにはこれが大切だと一般論を話しているようだったが、私には自分に言いかせているように感じられた。
③ 夫「大変ですね、勉強が、まあ皆一生勉強だから、何でもそうだけど、忍耐と努力と愛情が大切だね、そればかりじゃないけどやっぱり忍耐と努力だね。そして愛情。親子でもそうだし、私達みたいな夫婦愛でのもある」 Pt 苦しそうになり、右手を夫のほうにさし出す。 夫 握りしめて「痛いのか」 Pt うなって、私のほうへ左手をさし出す。	④ 手を握り「痛いんだね」 手を握りながら、夫と私はしばらく患者の顔を見つめている。	どんなことがあっても、最後まであきらめず、いつかは良くなるだろうという希望を捨てず耐えるという「忍耐」そして途中で投げ捨てない「努力」そして「愛情」
⑤ 夫 患者の足をさすりながら「こういう大きい病院でみてもらえて本当に感謝しているんですよ。設備も整っているし、水準の高い医療も受けられる。でも最終的には患者、家族の精神力ですよ。どんなにつらくても生きていくという力を失くしたらだめだね。ある程度のところまできたら妥協というか、協調性も大切だろうが……。でも、とにかく限界までがんばりぬく精神力だ」うっすら涙をうかべている。 Pt 時々夫の顔を見ながら聞いている。	⑥ 時々相槌を打ちながら聞いている 「それは医療者側も全く同じですよそれこそ忍耐と努力と愛情ですよね」	信大のような大きな病院にいることを感謝しているようだ。しかし最終的には、患者、家族の精神力だと言う。確かにそうだと思う。どんな状態になっても生きる力を失ってはならない。患者、家族、医療者側が心をつ一つにして立ち向わなければならない。
⑦ Pt 時計を見る(18:50)毎日娘さんが来る時間である。	⑧ 「そろそろ私帰ります。土、日と休みだから月曜日から来ますね」	「妥協」という言葉を使いハッとした。何回も命をとりとめこまで来て、今このような状態におかれ「死」を考えずにはいられないだろう。夫は、否定しながらも自分に言い聞かせるように、少しずつ死を迎える準備をしているようだ。
⑨ Pt 「そう」と手を強く握ってくる。	⑩ 「頑張ってるね」	患者は夫の言葉をどう受けとめているのだろうか。表情を少しも変えなかった。夫はいろいろなことを一気に話した。声に出して言わずにはおれなかったのだろう。それだけ精神的に動揺している。
⑪ Pt 「お別れ……」顔を向うへ向けてしまう	⑫ 手を握ったまま放すことが	とても帰る気になれなかった。「お別れ」の言葉にドキッとした。夫の話しや、自分も苦しみが続いていることで何かを悟ったのだろうか、私も今帰ったら2日間があく、その間にま

<p><しばらく沈黙> Pt 「親子の名のりをあげてるみたい」</p>	<p>できない。 「また来週会えるじゃない」</p>	<p>さか……。と一瞬暗い感情に陥った。もう少し側にいたいと思った。</p>
<p>⑬ しばらくの沈黙後、ひとり娘が自分のために婚約者と別れて帰ってきてくれた話をし、娘もかわいそうだが自分もつらいと話した。</p>	<p>⑭ 「娘さんもそろそろ来るから私帰ります」</p>	<p>娘さんには幸せになってもらわなければという思いで一杯のようだ。患者は、自分のために犠牲になって申し訳ないと、ずい分自分を責めている。もうこの話にはふれてはいけないと思った。</p>
<p>Pt 時計を見る (19:20)</p> <p>⑮ Pt 「行っちゃうって……」 夫のほうに向いて言いながらまた苦しそうになる。</p>	<p>⑯ 「じゃあ、私帰ります。月曜日○鳥さんの笑顔を楽しみに来るから頑張ってるね」</p>	<p>あいさつをしてすぐ帰るつもりだったが、なぜか帰ることができなかった。夫の気持、患者の気持、娘さんのこと等少しづつわかってきたような感じだ。</p>
<p><しばらく沈黙> Pt 時計を見る (19:30) 近づいて来る足音に聞き耳をたてているが娘さんではなかった。</p>	<p>⑰ 「頑張ってるね、みんなが応援してるから」</p>	<p>せめて娘さんが来るまで側にいてあげようとも思ったが、娘さんに対するあのような気持ちを聞いたり、痛く苦しがつても何もできないため、自分も胸が重苦しくなり、その場から逃げて来てしまった。私自身もっとしっかりしなければならぬと思った。</p>
<p>⑱ Pt 「ありがとね」</p>	<p>⑲ Pt 「ありがとね」笑顔で手を振ってくれる。</p>	

2. 場面構成における学生の気づき

(1) 場面B-1, B-2 (触れ合いによる接近) (表6)

実習初日の学生の緊張が、患者の対応で解きほぐされていく様子がわかる。学生は、患者のことが理解できず申し訳ないと思う気持ちを強く持っていたが、患者の笑顔や握手という触れあいを通し、より深く患者を理解し、看護しようという気持ちを持っていった。

(2) 場面B-3 (表情による意図的働き掛け) (表7)

患者の苦痛を学生も自分のことのようにつらいと感じ、言葉と表情で伝えている。それに対し患者は笑顔で答えている。言葉ではうまく伝わらなくとも表情、態度の大切さが理解できる。学生はそれを意図的な対応として苦痛な表情で接しており、これは患者に接近する重要な要素と思われる。

(3) 場面B-4 (家族の動揺に対する援助) (表8)

患者の状態が悪化するにつれて、夫の動揺がみられる。いままでは治療方針に従い協力的だった夫が、禁食の患者にアイスクリームを食べさせようとしている事を発見し、今まで夫と協力して患者を励まし看護してきたが、夫に対し、どのように対応していったら良いかと、新たな問題に直面している。

(4) 場面B-5 (死への援助) (表9)

夫は妻の死が目の前に近付いていることを察知し、その悲しみの気持ちを一気に喋って

表10 病状の変化に対する気付き

場面B-6 2月4日(実習第6日目) 16時 体位交換のため訪室

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
① Pt 体位交換後額に手をあて眉をしかめてうなっている。	② 「頭痛いの」	体位交換後必ず手を額に持っていくようになった。今までこんなことはしなかった。呼吸苦、喘鳴もなく以前の状態にもどったのかと思っていたが、やはり身体のほうはすぐには回復しないのだろう。
③ Pt 「……」聞きとりにくい	④ 「息苦しい? 酸素使おうか」	
⑤ 「Pt 体動かすと……慣れるまで……頭が重い……」	⑥ 「体動かした後慣れるまで頭が重くて苦しいんだね」	
⑦ Pt 「うん、体動かした後すぐ「痛いのか」って聞くから……」	⑧ 「そう、急に体動かすからね、今度からゆっくり気をつけてやるからね」	
⑨ Pt うなっている。		

場面B-7 2月6日(実習第8日目) 8時50分 朝の訪室時

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt うなっている。右側臥位でO ₂ 続行中。	① 「おはようございます」	朝のあいさつもしなくなった。ほとんど話さない。めんどくさいのか衰弱した感じ、活気がない、夫は今回も危険な状態から脱し、命拾いしたと思っっているようだが、私は受持ち始めた頃の元気が感じられず、吸引により喘鳴は消失したもののあまり良い状態とは思えない。
④ 夫「無意識のうちに抜いちゃったんだな、きつと」 Pt うなっている。時計を見る	③ 「夜大変だったね、じゃまだったの」(深夜 IVH のチューブを抜いてしまった)	
⑥ 夫「今日息子が10時に来るから代ってもらおうと思って」	⑤ 「今9時になるところですよ」	
⑧ Pt 表情を変えず、うなっているだけ	⑦ 「そうですか、だから時計を見て楽しみにしてるんだね」	

場面B-8 2月6日(実習第8日目) 12時 食事介助に訪室

患者及び家族の言動	学生の言動	判断・評価
② Pt うなっている	① 「食事が来たけれど食べますかどう?」	食事もしたくないほどつらいのか、「食べたくない」というのが、単に IVH をやっているからという理由からだと思えば、生きる意欲がうすらいできたと感じられる。
④ Pt うなっている	③ 「食べたくないの」	
⑥ Pt 「ううん」IVH に目をやりながら「食べたくない」	⑤ 「苦しいの」	
⑧ Pt 「うん」	⑦ 「そう、点滴で栄養つけてるからいいの?」	
	⑨ 「そうだね、じゃあ今はやめておこうか、食べたい時のほうがおいしいね」	

いる。今は妻が病気で、夫が妻の支えになっているが、それまではしっかり者の妻が、優しく甘えん坊の夫の支えになっていたのだろう。夫は今自分の支えを失うことに不安を覚えながら一生懸命看病することで自分を支えているのだろう。患者は自分の状態よりも娘のことを思い、親の子を思う心の永遠さを感じさせる。

学生は夫の気持、患者の気持を察し、聞き役に回り相槌を打っている。相槌を打ちながら、自分もその場にいる不安にかられ、口から出る言葉は『私帰ります』が中心になっている。しかし、その場を去ることができず、1時間30分の間に、三人の間に何か一体感がうかがえる。学生もこの間、看護における依存の対応について自分の役割を認識している。

(5) 場面B-6, B-7, B-8 (病状の変化に対する気づき) (表10)

一見危機を脱したように見えても、体位変換時のしぐさ、表情、朝の挨拶時の対応に患者の衰弱が感じられる。また、食べることにあれほど貧欲さをもっていた患者が、許可された食事を食べたがらないことなどより、次第に衰弱している状態の変化を見出している。

3. 教育的評価

場面B-1～B-4が一週目の関わりであるが、学生は、良く聞き取れない患者の言葉や、家族の苦悩の叫びに耳を傾け、患者理解にひたむきな努力をしている様子がみられる。又、患者の状態悪化につれ、常に冷静な態度で患者に接していた家族の動揺を感じとっている。

一週目のカンファレンスにおいて、看護者側からの意図的な働き掛けとしてスキンシップが重要であること。また、家族の患者に対する死の受容と準備を、看護者はいかに援助していったら良いかについて話し合われた。そこで看護の目標を(1) 安楽で平和な死への援助。(2) 家族の苦悩、動揺への援助。をあげ看護に取り組むこととした。

二週目の実習では、場面B-5～B-10にみられるように、スキンシップを意図的に実践し、家族の気持の変化にもきめ細かな対応がなされている。

学生Bは実習最後の感想で「患者は死期が近付きつつあることを感じとっているようだった。夫も何回も危ない時期を通るなかで、その気持ち否定しながらも死を迎える準備を自分に言い聞かせるように整えているようだった。癌の末期患者に接する度にいつも看護の無力さを思い知らされ、逃げ出したいほどの悲しみに襲われるが、今回もやはり同じであった。しかし、それ以上にその悲しみを家族と共にすることで、心のつながりを少しでも持てたのではないかと思ひ嬉しかった。」と述べ、終末期看護の難しさの中で目標共有の大切さに気付いている。

VI 考 察

婦人科実習において、一人の終末期患者とその家族を看護する学生の看護過程を振り返る中で、患者理解を深め、看護実践に取り組むための実習展開について考えてみる。

1. 実習目標の認識を深める

今回実習の大きな目標は、1) 患者及び家族と看護者(学生)の看護の目標共有と、有効な看護実践。2) 目標共有のためのきめ細かな観察と意図的な働き掛けの実践である。

目標共有のために、まず①目標の内容(身体的、精神的、社会的)と、②目標の所在(患者の目標、家族の目標、看護者の目標)と、③目標の達成時期(長期的目標、短期的目標)について認識を深めることの必要性を指導した。

又、目標共有のための、きめ細かな観察と意図的な働き掛けについては観察の内容、働き掛けの手段として、言語同様表情、態度が重要な要素となる。

学生Aの関わりの中で、患者の症状は比較的安定した時期にあり、言葉による働き掛けが主となっている。場面A-1、A-2は、問い掛けることにより、死を覚悟しながらも生きることへの望みを持ち続けている患者の目標をつかみ、丸山ワクチンに最後の望みを託し、回復を信じようとする家族の目標もつかんでいる。その中で目標に対し努力するという看護者の目標も伝えられている。また、場面A-6では、患者の鏡を見入る表情や態度を鋭く観察し、次の看護行為に結び付けている。他に身体的目標としてA-3では、足が動いてほしいという患者の目標を、A-5、A-7では、排便のあること、食欲のあることは健康な証拠として認識させたい家族の目標をつかんでいる。

学生Bの関わりでは、患者の衰弱が強くなり、言葉によるコミュニケーションが困難となってきた。場面B-3では、患者の苦痛を自分も苦痛であると、辛そうな表情で接することを意図的な働き掛けとして排泄に対する目標共有に努め、場面B-5では、患者及び家族の訴えに相槌を打つという傾聴の態度で接することにより、娘の幸せを願う患者の目標をつかみ、どんなに辛くても最後まで頑張り抜くという家族の目標をつかんでいる。また、実習初期に患者理解、接近に苦悩していた学生は、患者の笑顔、握手というタッチング行動によって励まされている。しかし、実習後半では、患者の手を握り返すというタッチング行動は、患者を励まし勇気づける意図的な看護行動に変化している。

この様に、学生は実習目標である目標の共有に努力することにより、患者理解を深め、次の看護目標の明確化につながっている。

これらの目標に十分理解を得るためには、実習前のオリエンテーションが大切であることが再認識できた。

2. 実習病棟との情報交換により効果的に実習を展開する

婦長、病棟スタッフ、教官の出席により話し合いがもたれ、学生背景、実習目標、方法について確認した。また、学生Aの実習において、カンファレンスに出席できなかったスタッフに対し、学生の気付きと今後の看護目標を伝達する機会を得た。

D. E. Reilly¹⁾は、臨床実践の評価は教官、臨床指導者の他患者、家族等の監視のまなざしのもとで行われるため、学生が傷付きやすい状態にあることを教官は容認することが大切であると述べている。短い実習期間に学生が、効果的に伸び伸びとした実習展開を実践するためには、病棟スタッフに学生の背景や実習目標、方法に対する理解を得られるようにすることは重要である。そのため教官は、実習前はもちろん、実習中のあらゆる機会を利用して、病棟スタッフと学生の情報交換の場を作ることが重要である。

3. 受け持ちケースの選択には学生の背景も考慮する

ケースの選択は、実習目標に基づき婦長、教官で選択したが、その選択基準として、患者の病状、看護の必要度、家族対応の重要性を視点とした。又最終的なケース選択は、学生自身が行った。小島²⁾も、学生が受け持ちケースを自分で決定しない場合、依存的となり、困難に直面したときなかなか切り抜けることができないと述べている。学生Bは、患者家族の訴えにその場から逃げ出したい気持ちになりながら、そこを切り抜ける努力をすることで、気持ちのつながりを得たと感じている。

また、波多野³⁾らは終末期看護は、単に教育や看護技術上の問題ではなく、看護する学生の人間形成とも深く関わっているという。学生Aは内科での終末期看護の経験もあり、ある程度患者、家族の状態を客観的に評価し対応している。学生Bは、看護経験も浅く患者家族と気持ちを同一化し、主観的な対応もみられる。そのためケース選択については、学生の看護経験も評価し対応することの必要性を感じた。

4. プロセスレコードによる看護過程の振り返りから学生の気付きを把握する

この方法は H. E. Peplow により提唱され、看護過程を振り返り、評価するための有用な方法として幅広く用いられている。

坂本⁴⁾は、プロセスレコードによる場面の再構成の意義について

①自分自身の看護を振り返り、自分自身の特徴や陥りやすい傾向について分析することができる。

②自分自身の看護を客観的に評価できる能力を身に付けることができる。

③教師の助言や仲間とのディスカッションにより考察を深めることができる。

としている。

今回プロセスレコードをとることにより、患者をより深く理解すると共に、学生自身実習目標の展開が評価でき、次の看護行為への移行がスムーズに行われている。教官としても学生の気付きを明確につかむことができ、ディスカッションを通し、看護目標をお互いに確認することができた。

5. カンファレンスにより看護目標を明確にする

看護は多くの場合グループ活動であるから、グループプロセスへの学生の参加を意味する行動を明確化し、評価することは極めて大切である。その一方法としてカンファレンスは重要な役割を持つ。

学生はカンファレンスの場で看護場面を説明し同僚、教官、臨床指導者から批判的、同調的評価を求めることにより、看護の方向性を明確にしていくことができる。特に臨床指導者からは、今までの患者の経過から見て学生の立場、役割について示唆を得ることは大切である。

教官はディスカッションの中で、学生自身が看護目標を決定できるよう現在の患者家族の状態、今後の変化に対する予測、学生の気付きを明確にすることが必要である。

今回プロセスレコードを通してディスカッションされ、学生自身看護の方向性が明確となり、具体的看護実践への取組みが成されたと考える。

Ⅶ おわりに

臨床実習において、学生がより深く患者を理解し、効果的な看護展開が実践できるため、実習目標を患者及び家族との目標共有と、そのための意図的な働き掛けとして実習展開を実施した。

二人の学生はこの終末期患者と家族の看護を通し、患者理解の必要性と、そのための意図的な働き掛けの重要性を深く認識した。そして終末期看護における「生への援助」「死への援助」を体験し、生から死への看護について考え、人間として、専門職業人として大きな成長につながったと考える。

このような気付きを学生が体験できるため、教官としては実習前オリエンテーション、実習病棟との連絡、受け持ちケースの選択、看護過程の振り返り、カンファレンスによる実習目標の明確化等、実習環境の調整に十分配慮することが重要である。

また、臨床実習に際し学生は、大きな緊張と不安を抱いているものである。今後、教官として学生に対する信頼と受容を基本とした支持的態度により、学生の緊張と不安を最小限にとどめ、実習目標が最大限達成できるよう実習展開、実習評価を実践したいと思う。

最後に実習の場を提供し、学生指導に惜しみない協力をして下さった婦人科病棟の伊藤和子婦長はじめ、スタッフの皆様へ感謝する。

引用文献

- 1) D. E. Reilly. R. N., Ed. d, 近藤潤子他訳：看護教育における行動目標と評価, 医学書院, 1980
- 2) 小島操子：臨死患者に対する看護実習と学生の対応, 看護教育, 27(3), 151, 1986
- 3) 波田野野子他：看護学生の終末期患者への援助的認識と看護行動傾向の学生による差異, 看護研究, 14(1), 62, 1981
- 4) 阪本恵子：プロセスレコードによる看護場面の再構成の意義, 自己評価（自己の振り返り）のための一方法, 助産婦雑誌, 38(1), 908, 1984

参考文献

- 1) 布施徳馬：生と死への問いかけ一齋で死にゆく人々の中で, 医学書院, 1983
- 2) 池川清子：看護体験の構造化一看護上の問題点とは何か, 看護教育, 20(1), 21, 1979
- 3) J. S. Hays. K. H. Larson, 日本赤十字社医療センター看護研究会訳：看護実践と言葉一患者との相互作用, メヂカルフレンド社, 1976
- 4) 久保智代恵, 小野寺綾子：気づきと学びの看護一ある看護教育実践記録, 看護の科学社, 1978
- 5) L. J. Davitz. 樋口康子訳：看護場面の心理プロセス一事例学習法による展開, 現代社, 1977
- 6) 野島良子：看護論, へるす出版, 1984
- 7) 外口玉子編：問われ問いつづける看護, 星和書店, 1977
- 8) Wiedenbach. E. 外口玉子訳：臨床看護の基本, 現代社, 1979

(1986年9月30日 受付)